

## 命尽きるとも

先日、札幌市内のギャラリー“たびお”で開催された「三瓶彩子さんの作品展」を見ました。

三瓶彩子さんは、3歳の時に「急性リンパ性白血病にかかり、骨髄移植が間に合わず僅か7歳で亡くなりました。彼女は、画家になることを夢見る少女で、亡くなるまでの間、病気との苦しい闘いを続けながら病院のベッドの上で8000点もの絵を描き続けたものです。

作品展は、30点ほどの作品を集めて展示してありましたが、いずれも明るく、かわいい絵の数々でした。

彼女の明るい絵を見ながら私は、彼女は、必ず病気は治ると希望を持ち続けていたのではないか、その願いを込めて描き続けていたに違いないと感じます。そして、その明るさがかえって我が胸を打ってくる、そんな思いが強くなりました。

彩子さんの絵を見ながら、私は、もう一人小学校6年生で亡くなった豊島加純さんのことを思い出しました。加純さんは、5年生のころ体調を崩し、脳腫瘍と診断され「余命は、半年から1年間」と宣告されます。

病状が悪化し、右半身麻痺の状態の中で書いた「12色」という詩が尾幌小中学校の小山内先生の目にとまり、先生からノートを手渡されたところから加純さんの詩作が始まります。

12色

ここには、12色のいろがある

目立たない色もあるけれど

みんな

がんばっている

ひとつ ひとつ

彼女は、イラストを添えた作品14編をノートに残していますが、自分の病気のこと気付いていたからでしょうか、ノートには、詩を書いた日にちと時間が書き込まれています。それを見ると、彼女の命を愛おしく思う気持ちがひしひしと伝わってきて、切なくなります。

加純さんは、11年という生涯を一生懸命に生きたと思います。

彩子さん、加純さんお二人は、共に、生きた期間は私よりも遙かに短くはありましたが、その命の輝きは、今後も、彼女たちの残したメッセージを通して、色あせることなく多くの人々の心に伝わっていくことでしょう。(塾頭 吉田 洋一)